

福祉のまちづくり学会震災復興調査委員会(住まいの調査班)視察および聞き取り調査

日程 : 7.23(土)～24(日)

参加者 : 岩手県立大学 狩野徹、 聖学院大学 野口祐子、 STUDI03 橋本彼路子
(23日のみ岩手県立大学社会福祉学部4年生2名参加)

岩手県の遠野市、大船渡市、釜石市、陸前高田市にある7つ仮設住宅団地を視察し、その内の3つの仮設団地では住民代表の方から聞き取り調査をした。

◇遠野 希望の郷「絆」(視察)

被害の少なかった遠野市は沿岸部の被災者を後方支援している。東京大学と岩手県立大学が計画に参加した話題の仮設住宅で、地元の建設会社が施工し、地元の木材を使用している。駅に近い、良好な住宅地に面した住みやすい環境であり、一般ゾーンとケアゾーンに分かれる。ケアゾーンにはデッキが張り巡らされていて、住宅が向かい合わせになってコミュニティが形成されやすい工夫がある。



◇大船渡市末崎小中井仮設団地(視察+聞き取り調査)

6月26日に入居説明会あり鍵を受け取った。6月26日から7月1日まで自由に仮設住宅に出入りができた。27戸の小規模仮設住宅で、現在満室である。避難所であった公民館から仮設住居に移動し、避難所の公民館の組織をそのまま引き継いでいる。仮設住宅は4畳半と6畳がある2DKの9坪タイプで3.5人用である。3人まで1戸の仮設住宅が与えられ、4人の場合は2戸が与えられる。地震発生後、津波到達まで20～30分はあったが、避難MAPやハザードMAPがあり、明治の津波規模で周知されていたため、前知識が仇となり、自分のところは津波がきても大丈夫と思って実際に津波を見てから避難をはじめた。小規模な団地のため、集会場がなく避難所に届いた支援物資のテントを使用している。住民の要望は集会場の設置と子どもの遊び場の確保である。住居内の問題は、バスタブのエプロンは58cmあり、またぐのが大変なことと、浴室とトイレの前に段差(19cm)があることである。



◇釜石市平田仮設団地(視察)

岩手県における最後の大型仮設住宅で23日は建設途中で未入居であったが、8月6日から入居がはじまった。一般ゾーン、ケアゾーン、子育てゾーンがあり、今後、仮設店舗やサポートセンターが建設される。東京大学と岩手県立大学が計画に参加している。



◇陸前高田市米崎神田仮設団地（視察＋聞き取り調査）

米崎中学校敷地に建てられた仮設住宅団地で、住民の元の住所は、高田町 26 世帯、米崎町 53 世帯、小友町 2 世帯、広田町 1 世帯である。12 坪タイプを集会所として使用している。ゴミ出しや駐車場のルールは特に決めておらず、良心に任せている。離れたところ(下の敷地)に 60 台分の駐車場があるが、住宅のすぐ近くにとめる人が多い。ゴミ出しなど当番はなく、自主的に行っている。家電 6 点セットはこれまで使用していた家電より多くなったため、電気代がかかり金銭的な負担が大きくなっている住民がいる。どこの仮設住宅もそうだが、長い砂利道が、お年寄りの足を痛めそうであるし、ベビーカーや車いすの使用も難しい。岩手県では簡易舗装することに決まった（2011 年 8 月の情報）。



◇陸前高田市小友町瀬沢第 2 仮設団地（視察）

オートキャンプ場であったので、区画ごとに上下水道、電気があり、被災直後より避難所として利用されていた。6 月以降は仮設住宅団地が設置された。団地を造った時期により仕様などが違い、遅い時期ほど仮設住宅全体の使い勝手や仕様がよくなっている。



◇陸前高田市高田町長砂仮設住宅団地（視察＋聞き取り調査）

高田高校敷地に建てられた仮設住宅である。6/7 仮設住宅入居説明会に参加、6/11 入居可能となった。自治会長 1 名、副代表 3 名で 3 つのブロックをそれぞれ担当している。6/7 に事務局長や会計係も決めた。草刈りの費用や外灯の電気代の負担がある。配布物を配る仕事は副代表が担当。駐車場のトラブルもあったが、話し合いで解決している。184 世帯のうち 130 世帯ほど入居している。砂利道は歩きにくいという住民の声がある。子どもの遊び場、集会所はない。空き部屋はあるが、いつ入居者が決まるかわからないので、今の段階で集会所として使うことは難しい。地震前の住宅はエアコンなしでも十分涼しかったが、仮設住宅はむき出しの鉄骨が熱くなり、また、砂利道の照り返しもあり、エアコンなしでは生活できないということであった。寝室は 2 つあるがエアコンが 1 つしかない。むしろ間仕切りはいらないのではないかという意見があった。



◇高田一中 仮設住宅団地（視察）

岩手県で初めてできた仮設住宅団地。中学校の敷地は避難所にもなっていて、仮設の救護所がある。

